リベット

睦月　付喪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リベット

【Ｎコード】
Ｎ２８６３Ｇ

【作者名】
睦月　付喪

【あらすじ】
この、薄汚れた世界の縮図みたいな腐った学園。無法地帯を牛耳る孤高の覇王。この学園の誰もが夢見る絶対権力をめぐり、高貴な戦は幕をあげた。

００・『渇望にも似た欲望』

痛いだろ。と、俺を見下す男が嬉しそうに呟いたから鉄の味がする唾を吐いてやった。男は真っ赤になった拳を俺の頬に叩きつけた。脳味噌がぐらりと揺れ、目の奥で白い光が飛び散る。

再び広がる鉄の味に俺は眉を寄せ、男を殴ろうとしたが手が動かない。ぎしりと軋む首を動かすと、皮がめくれて鮮血が溢れている手が見えた。あーあ。これじゃぁ当分喧嘩もお預けだ。

男は次に俺の腹を蹴った。背骨に響く嫌な音と、こみ上げる嘔吐感。躊躇わずに吐いたそれは口腔の傷にじくりと響いた。

腹を抱えてうずくまる事もできない俺。自嘲気味に笑うともう一回鳩尾に入る汚れたスニーカー。噎せる俺の視界に現れた彼は、軽快な足取りで間延びした声を発した。

「たーま」

「あすか、センパイ・・・」

情けない俺の声に彼女は笑う。クロムハーツのピアスがきらりと太陽を反射させた。

「お遣いもまともにできねぇとか聞いてないんだけど」

踏み潰されたハイライトのカートン。芙蓉　飛鳥は苦笑しながら俺に群がっていた男の一人を蹴った。文字通り吹っ飛ぶ男。あの、細

い足のどこからそんな力が出てくるのかと毎回思う。飛鳥センパイは中指を立てた。

「うちの可愛い子猫ちゃんに何してんだよ。ハイエナ」

万年袖をまくっている飛鳥センパイの細くて白い腕は、男達の顔面を華麗につぶした。

００・『渇望にも似た欲望』

飛鳥センパイは潰れたハイライトのカートンを拾うと、舌打ちを漏らした。

「クソ餓鬼が。喧嘩売る相手位考えろよな」

近くに倒れている男の背中を蹴りながら飛鳥センパイは、俺の襟足を掴み立たせようとする。俺は体中に走る痛みを堪え腰を浮かした。

「あーあ。ぼっこぼっこじゃん。たま、だせぇ」

赤紫に変色しているであろう俺の頬を小突きながら飛鳥センパイは笑う。俺はその手を払い頭を下げた。

「すんません・・・タバコ・・・」

「いーよ。いーよ。気にすんな」

「でも・・・」

「いーんだよ。猫はな、気まぐれな方が可愛いから。お遣い途中に喧嘩位飼い主は気にしねーよ」

飛鳥センパイは制服の胸ポケットからぐしゃぐしゃになったハイライトと、スカルジッポを取り出し咥えたタバコに火をつけた。そして、深くそれを吸い込み吐き出すともう一度俺に笑いかける。悪魔のような微笑み。俺は、口の中に溜まった砂利と一緒に真っ赤な血を飲み込んだ。

――芙蓉　飛鳥は覇王の名に最も近しい人物だ。と、誰かが言っていた。

この、薄汚れた世界の縮図みたいな腐った学園。無法地帯を牛耳る孤高の覇王。この学園の誰もが夢見る絶対権力をめぐり、高貴な戦は幕をあげた。

01・『サーカズムな女　の　真面目な猫』

がしゃん。響く窓ガラスが粉砕する音。

ごきっ。響く人を殴る音。

べりっ。響く菓子パンの封を切る音。

今日もこの学校は平穏極まりない。救急車のサイレンが近づく音も、低い叫び声も、野次馬の罵声も、すべてがこの学園のバランスをとっている。

スプレーで汚い裸婦画が書かれた窓ガラスの隙間からは、青い空が見えた。突き抜けるように青い、空。

01・『サーカズムな女　の　真面目な猫』

呆然と外を眺める俺を、ふいに彼女が呼んだ。

「たま。聞いてた？」

いいえ。全く聞いていませんでした。と、返事をすれば飛鳥センパイは不機嫌そうに眉を寄せジャムパンを噛み千切る。

「てか、アンタ3年でしょうが。なんで1年の教室でのんびり昼飯食っての」

「つれない事言うなよ。いたいけな女子高生をあんなケダモノの魔

窟に放り込む気か」

「普通の女子高生はこんな所に3年も居れねーよ」

校則違反のスカート。白いブラウスの上から羽織っているのは間違いなく学ラン。乱雑に切られた黒髪は、見る人によっては美少年にも見える。一人称の俺は男兄弟が多いから自然と定着してしまった、と、本人は聞いてもいないのに言っていた。
彼女の胸元で揺れるフィリグリーのネックレス。右耳にはピアス。ただの女子高生とはかけはなれた存在。

飛鳥センパイは食べ終わった菓子パンの袋をぐしゃぐしゃにすると、ゴミが溢れているゴミ箱に放る。奇麗な放物線を描きゴミの一部になったビニールに、彼女は嘲笑うように喫煙をした。重いハイライトは、クールな香りを漂わせ飛鳥センパイを取り巻く。

「吹き溜まりのゴミ箱は何時見てもきたねぇよな。何、このクラスには美化委員とか居ねーの？」

居る訳無いでしょ。と、返答しようとした矢先机が俺の横をかすめた。ばりん。割れる窓ガラス。生ぬるい風が瞬く間に教室の中に吹き荒れた。

硬直する俺を尻目に飛鳥センパイはタバコを優雅にふかす。

「おい、テメェが砂原　多牧か？」

野太い声に呼ばれ俺は我に返り舌打ちを漏らした。振り返るとそこには汗くさそうなハゲが一人。俺は頷く。

「そうだけど。何か用？」

男は品定めするように俺を上から下。やがて、口端を吊り上げ笑った。

「浦安最強と呼ばれた男がこんなモヤシだとはな・・・」

「あ゛ぁ゛？」

失礼なハゲめ。自他共に認める程短気な俺の貧乏揺すりが始まる。

俺は立ち上がりハゲの胸倉を鷲掴む。ハゲは笑いながら拳を振り上げた。俺は避けない。いや、避けれない。飛鳥センパイを見ると楽しそうに微笑みながら二本目のハイライトに口をつけていた。次いで、先程殴られた場所に広がる鈍痛。口の中は一瞬にして血の海だ。次いで、鳩尾。胃が震える。かすむ視界で男はニヤニヤと笑っていた。

「ざまぁねぇな。良いのは威勢だけかよ」

歯の奥を食い縛り俺はぺっ、と、血を吐き出す。

「うるせぇよ。ハゲ」

不敵に笑って見せるとハゲは怒りにまかせて俺の腹を蹴った。がたがたと倒れる机や椅子。盛り上がる野次馬を両断するように、飛鳥センパイは口を割った。

「俺の可愛いクソ真面目な猫。俺（あるじ）の前で惨めな姿を見せるな」

「っ、アンタってマジで滅茶苦茶な人だな」

痛みを知る為に喧嘩をするな。と、言ったのは飛鳥センパイ。先程の喧嘩の時もその事を覆す素振りも見せなかったのに、今はこんなに簡単に意見を翻す。訳の分からない女。

俺は立ち上がり、先程の喧嘩でボロボロになった拳をハゲの顔面めがけて振りかざす。やっぱり、俺には我慢は似合わない。
みしり、と、手の骨に食い込む肉の感触がどうしようもなく心地良かった。
鈍い音を立て倒れるハゲ。一層盛り上がる歓声に、俺は静かに溜息を漏らしながら飛鳥センパイを見た。

紫煙を吐き出しながら彼女は哂う。

「惚れ直したよ。たま」

「・・・当然すよ」

俺は自分の席に戻り、飛鳥センパイと向き合いながら再び昼飯を食う。昼飯のリンゴジュースは半分以上残り、結局飛鳥センパイの腹の中。
昼休みが終わるチャイムはまだ鳴らず、壊れた窓からは突き抜けるような青い空が見えた。

02・『太陽を喰う時』

「たま」

「なんすか？」

「コレ、やるよ」

渡されたのはカフスボタン。飛鳥センパイがいつも着ているブラウスに装飾しているのと同じブランドのそれだった。いつもはTシャツだが、今日に限って彼女がカッターシャツで来いと言ったのは、これの為か。と、俺は納得する。

俺はダガー。彼女はクロス。

「・・・何万？」

「6万」

「貰えません」

「貰っとけって。首輪がわりだよ。ネックレスやろうにもお前、金属アレルギーなんだろ？」

「・・・ろくまんえん」

「正確に言うと5万ちょいだけどな」

「今日、誕生日じゃないんすけど」

「馬鹿。今日から運動会の練習だろ？お前は俺の派閥っていう目印だよ」

運動会。血が舞う運動会なんか始めてだよ。

０２・『太陽を喰う時』

初夏。飛鳥センパイと出会って早３ヶ月たった６月上旬。始めての運動会。

砂埃が舞う中普段は喧騒に包まれている校舎には人ひとりおらず、全員がグラウンドに整列している。入学式以来のその光景に息を呑みながら、俺は隣に並ぶ飛鳥センパイを一瞥した。

「運動会って、具体的に何するんすか」

「喧嘩」

やっぱり。いや、ここで「綱引き」とか「玉入れ」とか「リレー」とか言われると逆に戸惑うんすけどね。

「けど、ただの喧嘩じゃねーよ。この運動会で四伯（しはく）と六禅（ろくぜん）のメンバーが決まるからな」

「・・・しはくとろくぜんて何ですか？」

「お前。モグリだろ」

飛鳥センパイは溜息を吐きながら目を細めた。習うように俺も彼女の視線を追う。居るのは１０人の男女。

「一番端の優男が九条　京輔。最大の勢力≪青猫≫の牡猫だ。九条の横に居るデカイ乳の女が真柴　雫。学園の３割しか居ない女を統括した≪赤い蝶≫の女王。その横の筋肉ゴリラは田渕　晴夫。学園に伝わる由緒正しき≪覇王の剣≫の３２代目。その横が柏　瞬。いけすかねぇ２年坊主だが≪青猫≫と並ぶ≪ロキ≫の支配者だ」

「≪青猫≫・≪赤い蝶≫・≪ロキ≫はなんとなく分かりました。でも、≪覇王の剣≫っておかしくないですか？覇王じゃなくて覇王の剣ってまるで覇王の下っ端じゃん」

「その通り。≪覇王の剣≫は初代の覇王の舎弟が作った最古の派閥。覇王だけに仕えるプライドがクソ高い脳味噌がちがち連中の集団だ。今は覇王が居ないからおとなしいが、色んな意味で気をつけろよ。田渕はホモだからな」

「ホモ・・・・」

やっぱりこういう学校には多いんだ。白い目で見ていると、飛鳥センパイがからかうように笑う。

「お前変態が好きそうな体と顔してるから気をつけろよ」

「気色悪い事言うな」

くつくつと、喉の奥で笑う飛鳥センパイ。

「まぁ、四伯が一番覇王に近い奴らだ。って、分かっただろ？六禅は、各学年から選抜された選りすぐりの猛者の集団。今の六禅はよく分かんねーけど、あの可愛い子とチャラ男は俺達の派閥だ。３年最強と2年の女豹だぜ？俺、頑張ったんだからな」

「お疲れっす。それより、俺達の派閥って何ですか？」

「≪リベット≫　芙蓉　飛鳥が頭の合計・６人の派閥だ。まぁ、そのうちメンバーは紹介してやるよ」

「６人でよく派閥が作れましたね」

「まぁ、８割り以上が四伯の派閥だからな。妥当だろ」

つまらなさそうに舌打ちを漏らす飛鳥センパイを宥めていると、九条　京輔が一歩前に踏み出し微笑んだ。

「皆さん、この戦は派閥のプライドをかけての争いです。みじめな姿を曝さないように頑張って下さいね」

爽やかな笑顔がふいに、こちらを向き心臓が跳ねる。えっ？まさかこの人も・・・。しかし、俺の下らない被害妄想を否定するように九条　京輔は言葉を紡ぐ。

「遠慮はしないよ飛鳥。せいぜいその可愛い子猫と後少しの平穏に溺れる事だな」

冷酷な眼差しにぞわりとした。今までに感じた事のない悪寒が体中

を駆ける。震える俺の指先を隠すように、飛鳥センパイが一歩前に出る。

「舐めんじゃねぇぞ九条。俺は、テメェの童貞奪った女だぞ？腹括って待ってろよクソ餓鬼」

勢いよく中指を立てる彼女に、彼女に童貞を奪われたらしいその男は笑う。

———波乱の運動会はこうして幕を上げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2863g/

リベット

2010年10月10日03時31分発行